

- 1．食品に対する消費者の意識について
- 2．食品安全GAPについて
- 3．米の表示について

## 目 次

平成18年度食料品消費モニター第1回定期調査の概要	1
調査結果の概要	
<u>テーマ 1．食品に対する消費者の意識について</u>	
1．食品に関する安心感・不安感	3
1-2．安心や不安を感じる理由	3
2．国産品と外国産品の購入割合	5
3．安心して食生活を送るために農林水産省から提供して欲しい情報の有無	7
4．トレーサビリティを生産から小売までに導入すべきか	7
4-2．導入していくべきと考える理由	8
4-3．導入する必要はないと考える理由	8
5．生鮮食品を購入する際、原産地表示をみているか	9
5-2．原産地表示を見て購入する理由	9
5-3．原産地表示を見ないで購入する理由	10
<u>テーマ 2．食品安全GAPについて</u>	
6．食品安全GAPについて知っているか	11
6-2．食品安全GAPという言葉のをどのようにして知ったか	11
7．食品安全GAPに当たると思う取り組み	12
8．国内の生産者は食品安全GAPに取り組むべきだと思うか	12
8-2．取り組む必要がある又はないと思う理由	13
1．生産者に実践して欲しいと考える栽培・管理の方法	13
10．食品安全GAPに取り組んでいる農産物にはその表示をすべきと思うか	14
10-2．表示をするべき又は表示の必要はないと思う理由	14
11．食品安全GAPに取り組んでいる生産者や産地を知っているか	15
11-2．食品安全GAPに取り組んでいる生産者や産地を知った方法	16
11-3．希望する食品安全GAPに取り組んでいる生産者や産地情報の提供方法	16
<u>テーマ 3．米の表示について</u>	
12．米をどこで購入することが多い場所	17
13．米を購入する際の基準	17
14．米の品種名を表示するための根拠としてふさわしいと考えること	18
15．必要だと思う、時期に関する表示	18
16．単一品種を原料とする米の表示としてふさわしいと考える方法	19
16-2．複数の品種をブレンドした米に必要なと思う表示	19
集計表	21
最近における食料品消費モニター調査テーマ一覧表	76

## 平成18年度食料品消費モニター第1回定期調査の概要

### 1. テーマ

- (1) 食品に対する消費者の意識について
- (2) 食品安全GAPについて
- (3) 米の表示について

### 2. 調査の目的

- (1) 食品に対する消費者の意識について

消費者に向けた情報提供や、トレーサビリティの普及推進、食品表示の適正化、食品安全の確保に関する業務の参考とするため、食品に対する消費者の意識を調査しました。

- (2) 食品安全GAPについて

食品安全GAPの実践を推進することが、消費者が安心して食品を選択できることに対して実際にどれだけ影響を与えているかについて把握するため調査しました。

なお、GAPについては、農産物の食品としての安全性の確保のみならず、環境の保全、労働安全の確保等さまざまな目的を達成するために有効な手法との観点から、現在は、農業生産における工程管理手法として全国的に導入・推進を図っています。

- (3) 米の表示について

米について、包装して販売されているものについては、「玄米及び精米品質表示基準」に基づいた表示が行われていますが、平成12年3月の基準制定以降、米の生産や流通を巡る状況が変化している中で、米の表示方法を立案する際の参考とするため、消費者の米の購入の際に参考とする表示に関する意識を調査しました。

### 3. 調査の方法等

- (1) 調査時期

平成18年8月～9月

- (2) 調査対象者

食料品消費モニター（全国主要都市に在住する一般消費者）1,021名

- (3) 調査方法

郵送された調査票（質問用紙）にモニターが回答を記入、返送。

- (4) 調査票作成担当課

食品に対する消費者の意識について（消費・安全局消費・安全政策課）

食品安全GAPについて（消費・安全局農産安全管理課）

米の表示について（消費・安全局表示・規格課）

- (5) 回収状況

調査票配布者 1,021名

調査票回収者数 1,008名

調査票回収率 98.7%

- (6) 集計区分

（モニター年代別）20歳代 119名（12%）

30歳代	191名(19%)
40歳代	182名(18%)
50歳代	209名(21%)
60歳代	190名(19%)
70歳以上	117名(12%)

この他、地域別の集計を行った。

#### 4. 報告書を読む際の注意事項

(1) 集計表中、構成比(%)は、表章単位未満を四捨五入しているため、内訳の合計が100%にならない場合があります。

(2) 本文中のグラフ及び集計表の構成比(%)欄中の記号は、以下のとおりです。

「-」：事実のないもの」

「0」：表章単位に満たないもの」

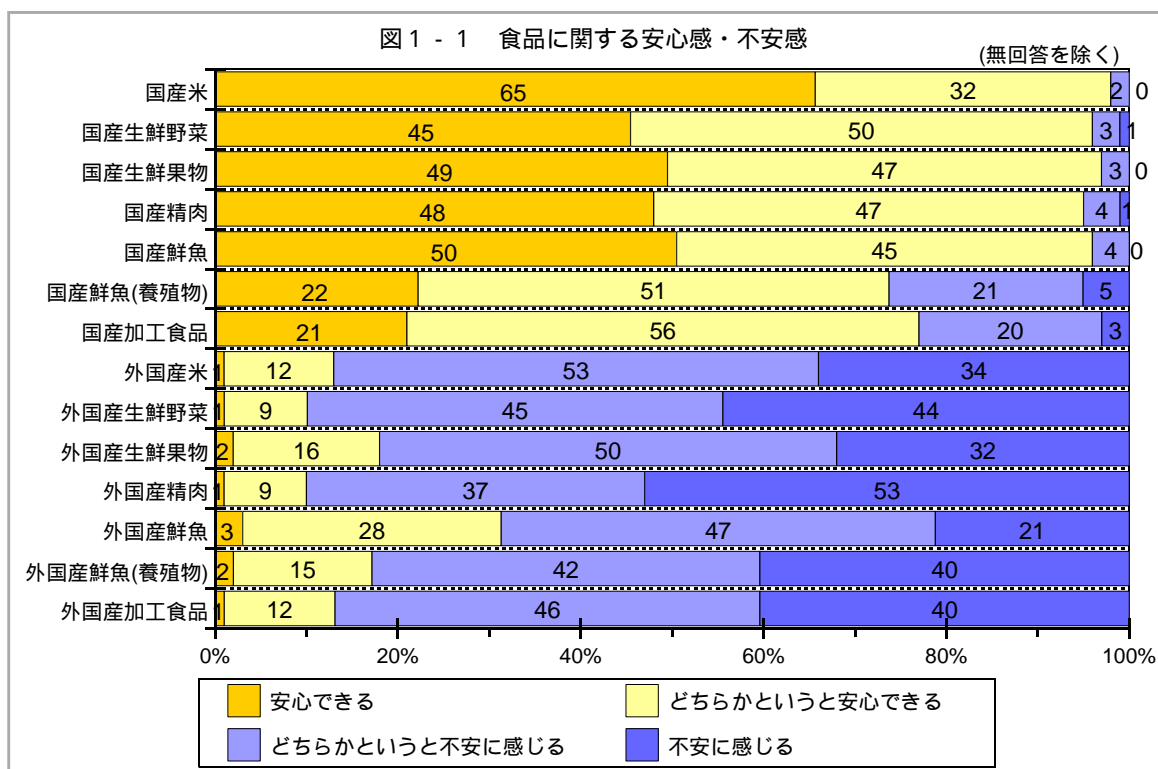
## 調査結果の概要

### テーマ1．食品に対する消費者の意識について

#### 1．食品に関する安心感・不安感

全ての食品において、国産品を安心できると感じている人が多い

米、生鮮野菜、生鮮果実、精肉、鮮魚、鮮魚（養殖物）、加工食品の7項目を国産と外国産に分けて、安心と感じているか、それとも不安と感じているか聞いたところ、全ての項目において国産品は「安心できる」、「どちらかというと安心できる」と回答した人の割合が高く、外国産品は「不安を感じる」、「どちらかというと不安を感じる」と回答した人の割合が高かった（図1-1）。



#### 1-2．安心や不安を感じる理由

国産品を安心と感じるのは「国内の生産者を信頼しているから」、外国産品を不安を感じるのは「輸出国の取組を信頼していないから」と回答した人が多い

次に、米、生鮮野菜、生鮮果実、精肉、鮮魚、鮮魚（養殖物）、加工食品の国産と外国産それぞれについて、安心や不安を感じるのとはなぜか聞いた（複数回答、3つ以内）。

国産品を安心と感じる理由としては、「国内の生産者を信頼しているから」、「国内の行政機関の取組を信頼しているから」と回答した人の割合が高く（表1-1）、外国産品を不安を感じる理由としては、「輸出国の取組を信頼していないから」、「外国産品だけ

ら」と回答した人の割合が高かった（表1 - 2）。

表1 - 1 安心を感じる理由

	1位	2位
国産米	国内の生産者を信頼しているから (92%)	国内の行政機関の取組を信頼しているから (37%)
国産生鮮野菜	国内の生産者を信頼しているから (89%)	国内の行政機関の取組を信頼しているから (28%)
国産生鮮果実	国内の生産者を信頼しているから (88%)	国内の行政機関の取組を信頼しているから (28%)
国産精肉	国内の生産者を信頼しているから (81%)	国内の行政機関の取組を信頼しているから (36%)
国産鮮魚	国内の生産者を信頼しているから (67%)	国内の小売業者を信頼しているから (32%)
国産鮮魚 (養殖物)	国内の生産者を信頼しているから (66%)	国内の流通業者(輸入業者を含む。)を 信頼しているから 国内の小売業者を信頼しているから (26%)
国産加工食品	国内の食品製造業者を信頼しているから (63%)	国内の生産者を信頼しているから (37%)

表1 - 2 不安を感じる理由

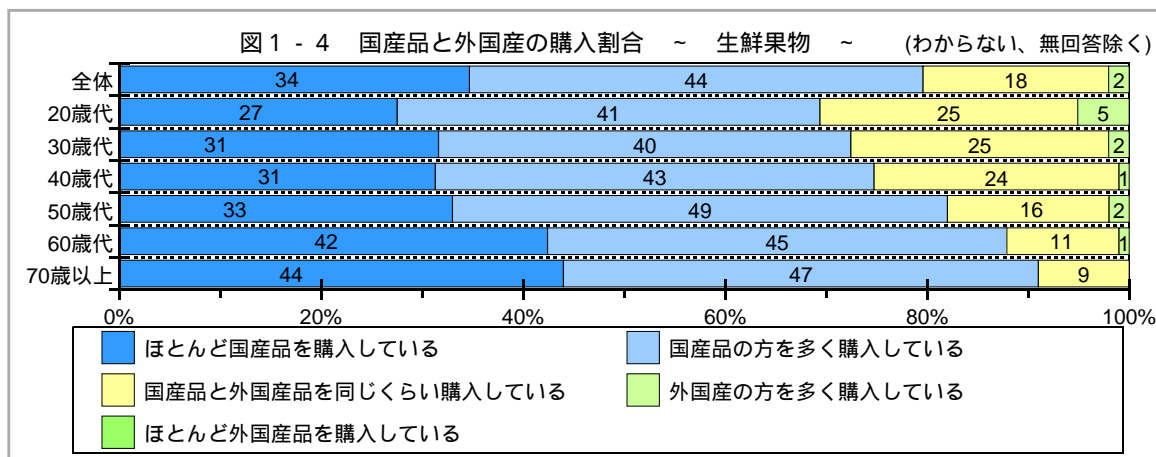
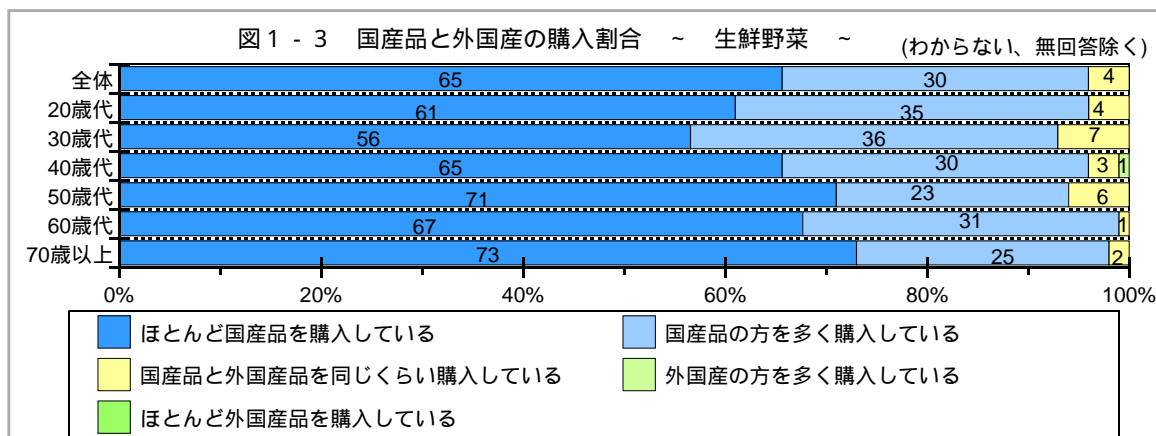
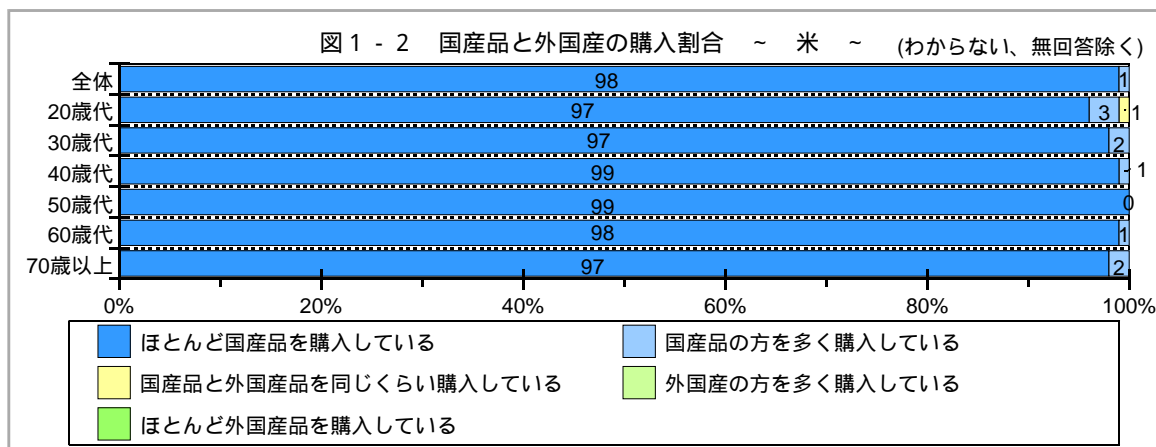
	1位	2位
外国産米	輸出国の取組を信頼していないから (69%)	外国産品だから (58%)
外国産生鮮野菜	輸出国の取組を信頼していないから (72%)	外国産品だから (54%)
外国産生鮮果実	輸出国の取組を信頼していないから (71%)	外国産品だから (53%)
外国産精肉	輸出国の取組を信頼していないから (78%)	外国産品だから (51%)
外国産鮮魚	輸出国の取組を信頼していないから (69%)	外国産品だから (53%)
外国産鮮魚 (養殖物)	輸出国の取組を信頼していないから (69%)	外国産品だから (50%)
外国産加工食品	輸出国の取組を信頼していないから (69%)	外国産品だから (54%)

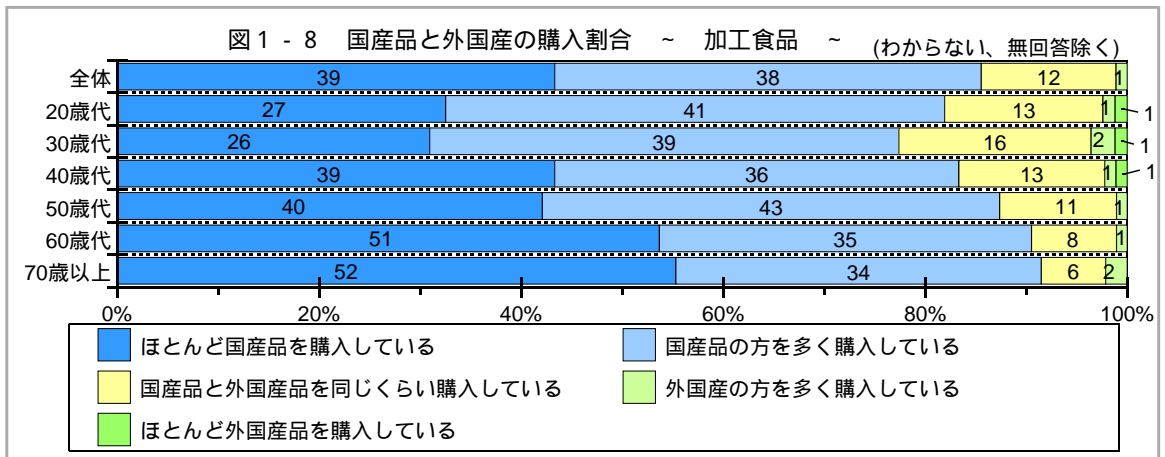
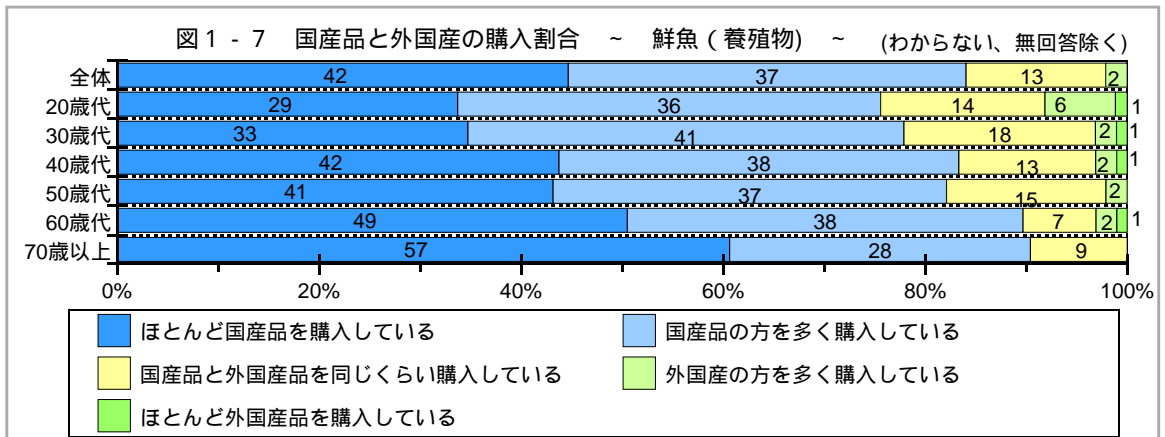
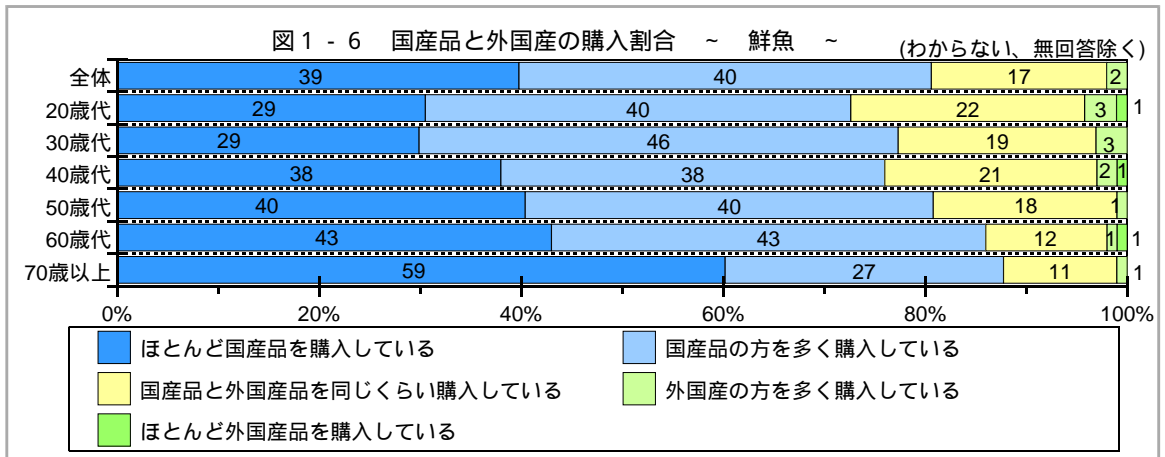
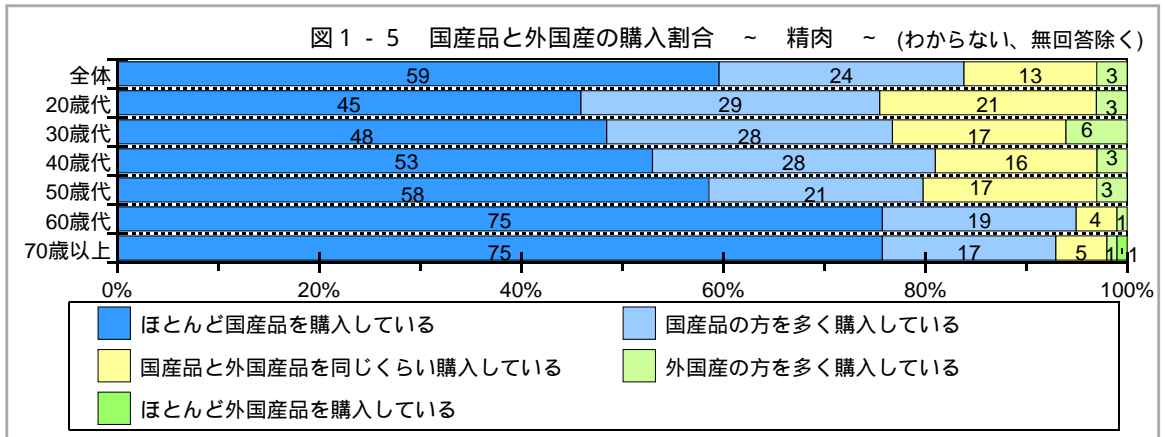
## 2. 国産品と外国産品の購入割合

国産品を多く購入（「ほとんど国産品を購入している」、「国産品の方を多く購入している」）と回答した人は、米、生鮮野菜で9割以上、精肉で8割以上

米、生鮮野菜、生鮮果物、精肉、鮮魚、鮮魚（養殖物）、加工食品の7項目について、国産品と外国産品をどの位の比で購入しているか聞いたところ、どの項目も国産品を多く購入（「ほとんど国産品を購入している」、「国産品の方を多く購入している」）と回答した人の割合が高かった（図1-2～1-8）。

年代別に見ると、米を除く食品はどれも、年齢の若い年代に比べ高い年代ほど国産品を多く購入していると回答した人の割合が高くなっていく傾向が見られた。



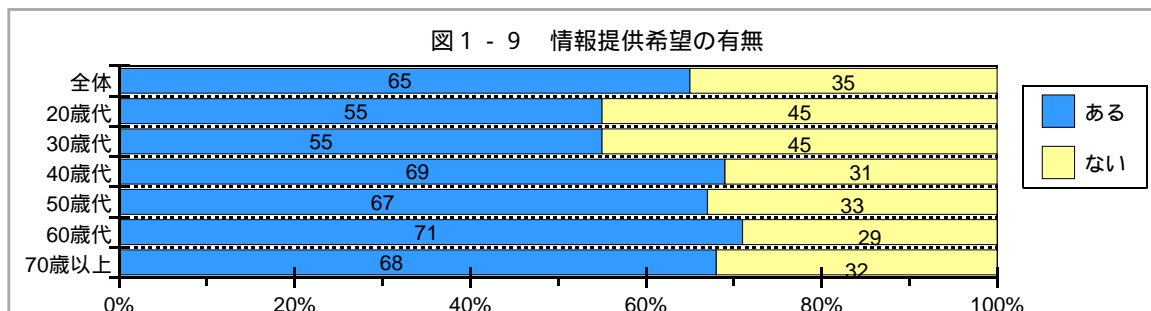




### 3. 安心して食生活を送るために農林水産省から提供して欲しい情報の有無

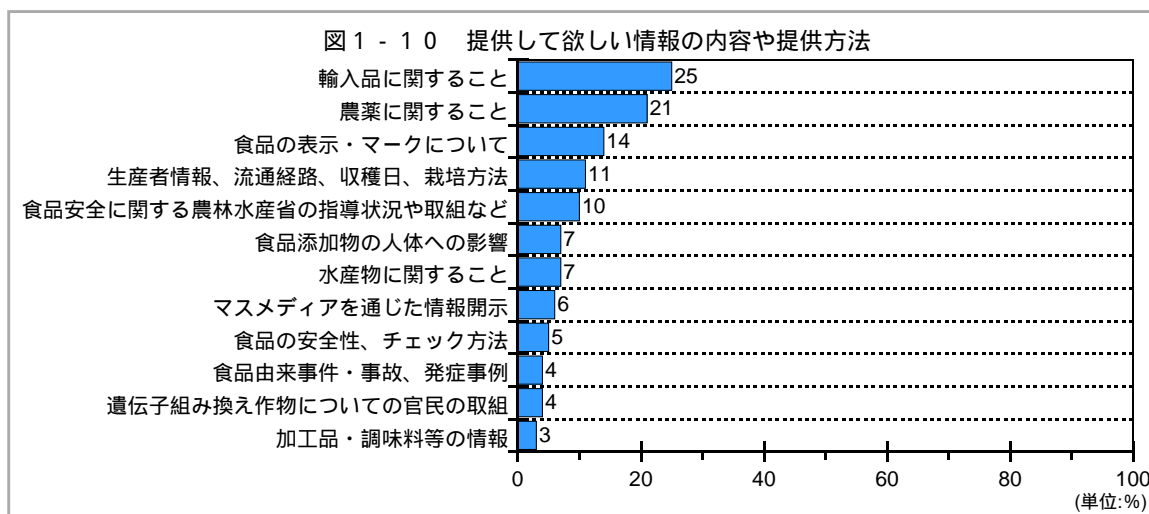
農林水産省から提供して欲しい情報は、「輸入品の安全性」や「農薬について」

安心して食生活を送るうえで、農林水産省から提供して欲しい情報はあるか聞いたところ、「ある」65%、「ない」35%であった(図1-9)。



「ある」と回答した人(653名)に、提供して欲しい情報の内容や提供方法は何か具体的に記入してもらったところ、「輸入品に関すること」、「農薬に関すること」、「食品の表示・マークについて」、「生産者情報、流通経路、収穫日、栽培方法」、「食品安全に関する農林水産省の指導状況、取組」など様々なものがあげられた。

なお、この問に対する回答は、記入のあったものを内容ごとに区分し、多かったものから10項目程度にまとめて集計した(図1-10)。

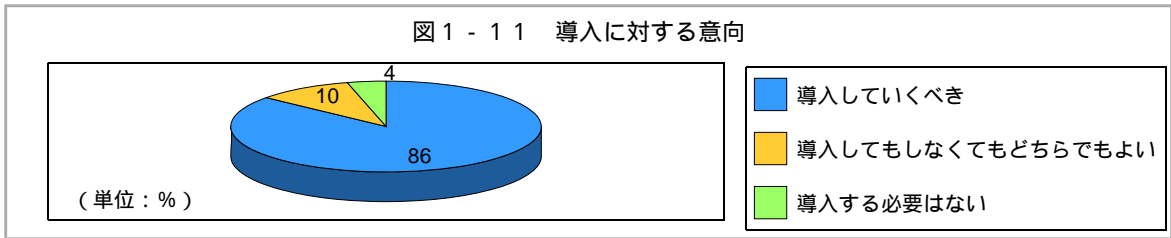


### 4. トレーサビリティ・システムを生産から小売までに導入すべきか

「導入していくべき」と回答した人が86%

トレーサビリティ・システムとは、食品が生産から食卓までどのようなルートを通ったか把握できる仕組みであるが、これを生産から小売までに導入していくべきだと思うか聞いたところ、「導入していくべき」86%、「導入してもしなくてもどちらでもよい」10%、「導入する必要はない」4%であった(図1-11)。

図1-11 導入に対する意向

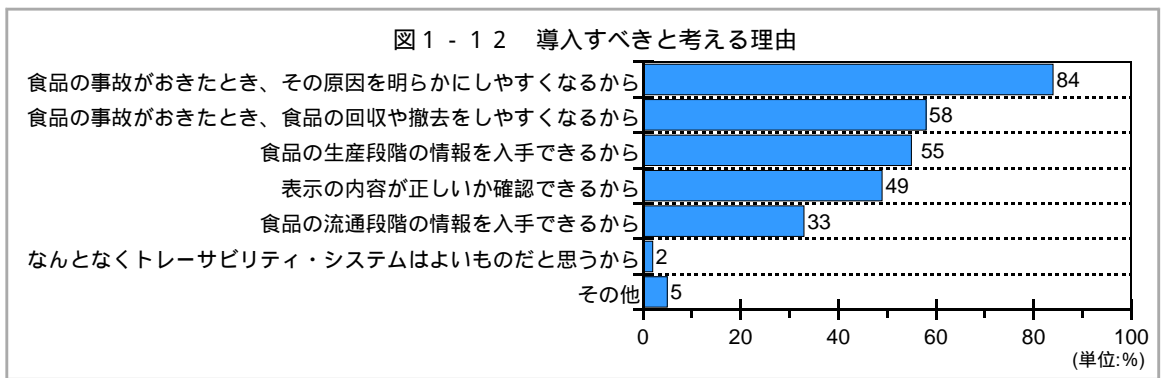


4-2. 導入していくべきと考える理由

導入していくべきと考えるのは、「食品の事故がおきたとき、その原因を明らかにしやすくなるから」と回答した人が84%

トレーサビリティ・システムを生産から小売までに「導入していくべき」と回答した人(864名)に、なぜそう考えるのか聞いたところ(複数回答、3つ以内)、「食品の事故がおきたとき、その原因を明らかにしやすくなるから」と回答した人の割合が高く84%であった(図1-12)。

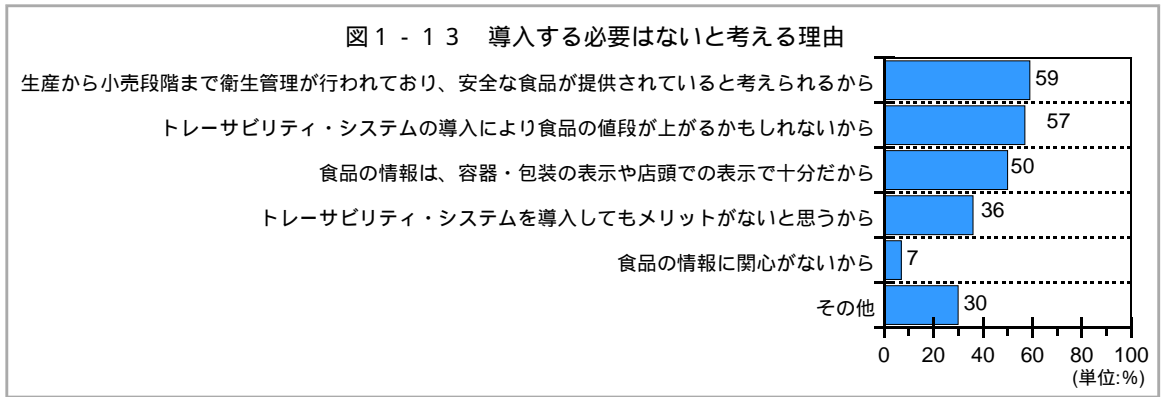
図1-12 導入すべきと考える理由



4-3. 導入する必要はないと考える理由

導入する必要はないと考えるのは、「安全な食品が提供されていると考えられるから」「導入により食品の値段が上がるかもしれないから」と回答した人の割合がそれぞれ59%、57%

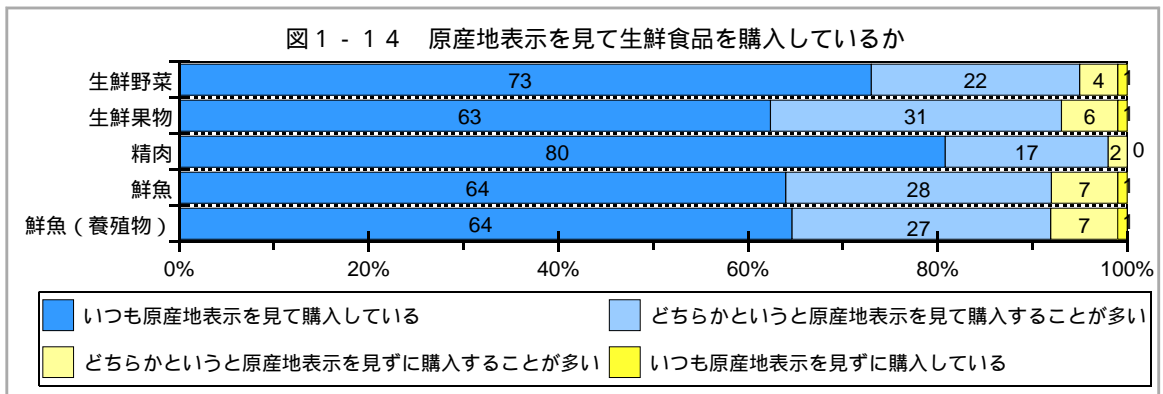
トレーサビリティ・システムを生産から小売までに「導入する必要はない」と回答した人(44人)に、なぜそう考えるのか聞いたところ(複数回答、3つ以内)、「生産から小売段階まで衛生管理が行われており、安全な食品が提供されていると考えられるから」、「トレーサビリティ・システムの導入により食品の値段が上がるかもしれないから」と回答した人の割合が高く、それぞれ59%、57%であった(図1-13)。



## 5 . 生鮮食品を購入する際、原産地表示をみているか

全ての生鮮食品において、「原産地表示を見て購入」（「いつも見て購入」、「どちらかというを見て購入」）と回答した人が9割以上

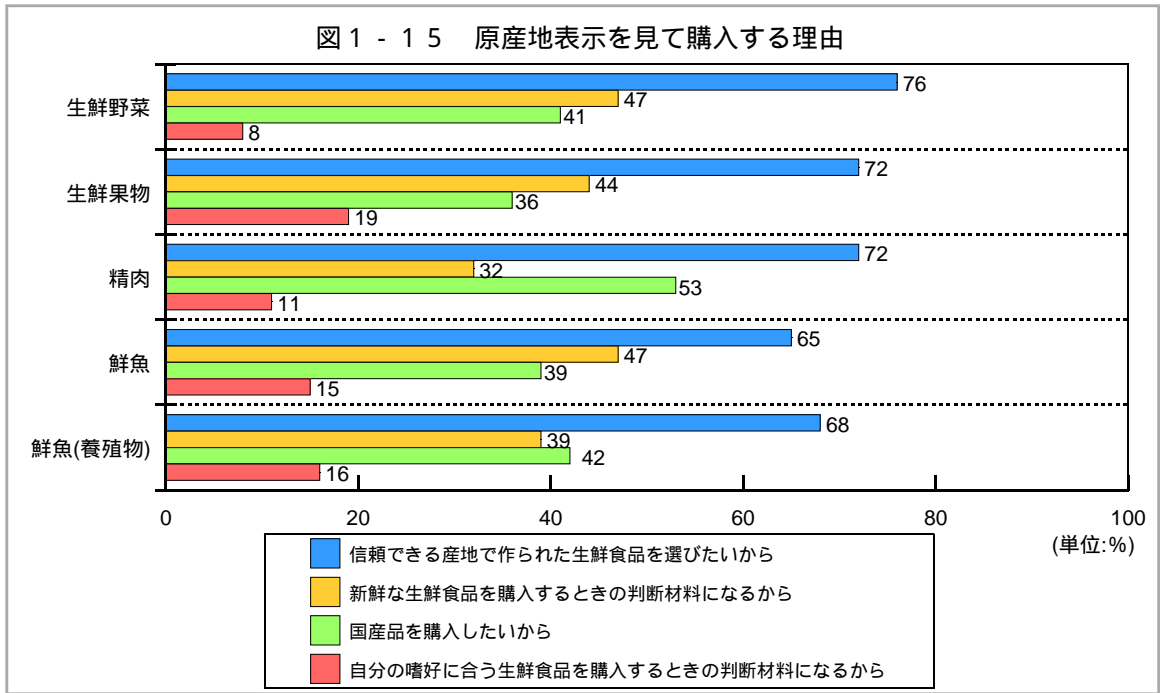
販売されるすべての生鮮食品には、その食品がどこで生産されたかわかるよう、原産地の表示が義務づけられているが、生鮮野菜、生鮮果物、精肉、鮮魚、鮮魚（養殖物）の5つの生鮮食品それぞれを購入する際に、原産地表示を見て購入しているか聞いたところ、どの生鮮食品も「原産地表示を見て購入している」（「いつも見て購入している」、「どちらかというを見て購入することが多い」）と回答した人が9割以上であった（図 1 - 1 4）。



## 5 - 2 . 原産地表示をみて購入する理由

生鮮食品について原産地表示を見て購入する理由としては、「信頼できる産地で作られた生鮮食品を選びたいから」と回答した人の割合が高かった

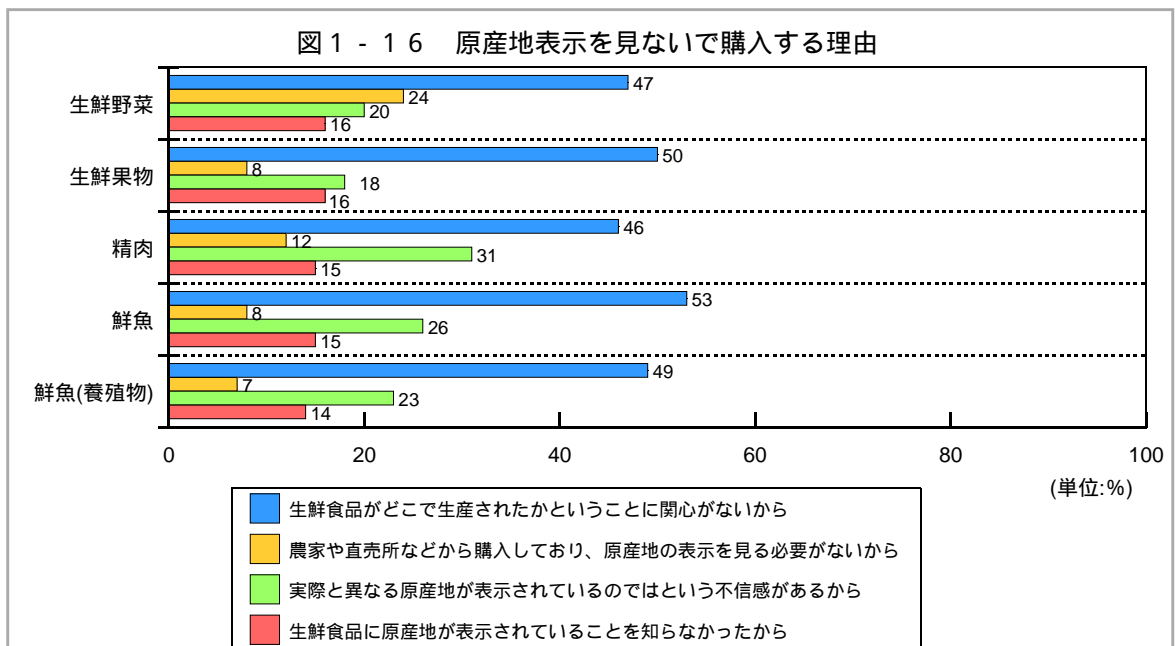
「5 . 生鮮食品を購入する際、原産地表示をみているか」で「いつも原産地表示を見て購入している」、「どちらかというと原産地表示を見て購入することが多い」と回答した人に、なぜ原産地表示を見て購入するのか聞いたところ（複数回答、2つ以内）、どの生鮮食品も「信頼できる産地で作られた生鮮食品を選びたいから」と回答した人の割合が高かった（図 1 - 1 5）。



### 5 - 3 . 原産地表示を見ないで購入する理由

生鮮食品について原産地表示を見ないで購入する理由としては、「生鮮食品がどこで生産されたかということに関心がないから」と回答した人の割合が高かった

「5 . 生鮮食品を購入する際、原産地表示をみているか」で「いつも原産地表示を見ずに購入している」、「どちらかという原産地表示を見ないで購入することが多い」と回答した人に、なぜ原産地表示を見ないで購入するのか聞いたところ(複数回答、2つ以内)、どの生鮮食品も「生鮮食品がどこで生産されたかということに関心がないから」と回答した人の割合が高かった(図 1 - 16)。



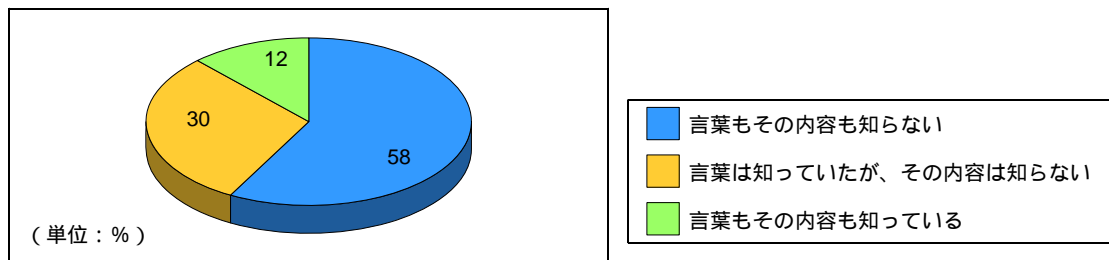
## テーマ2 . 食品安全GAPについて

### 6 . 食品安全GAPについて知っているか

食品安全GAPについては、「言葉もその内容も知らない」と回答した人の割合が高く58%

安全な農産物を生産するために「食品安全GAP」が有効な取組として注目されているが、「食品安全GAP」について知っているか聞いたところ、「言葉もその内容も知らない」と回答した人の割合が最も高く58%であった(図2-1)。

図2-1 食品安全GAPの認知度

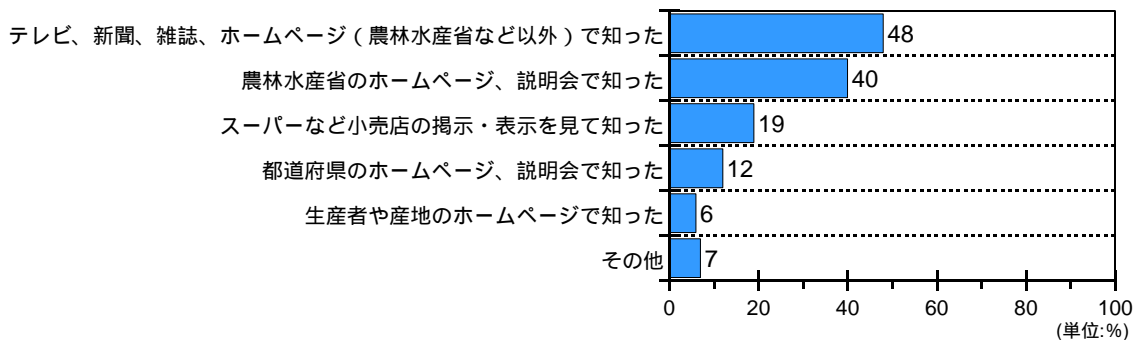


### 6-2 . 食品安全GAPという言葉を知ったか

食品安全GAPという言葉を知ったのは、「テレビ、新聞、雑誌、ホームページ」と回答した人の割合が48%

「6 . 食品安全GAPについて知っているか」で「言葉もその内容も知っている」または「言葉は知っていたが、その内容は知らない」と回答した人(427名)に、「食品安全GAP」という言葉をどのようにして知ったか聞いたところ(複数回答、該当事項を全て選択)、「テレビ、新聞、雑誌、ホームページ(農林水産省、都道府県、生産者や産地以外)で知った」、「農林水産省のホームページ、説明会で知った」と回答した人の割合が高く、それぞれ48%、40%であった(図2-2)。

図2-2 食品安全GAPという言葉を知った方法



## 7. 食品安全GAPに当たると思う取り組み

「生産の過程で食品の安全性に悪い影響を与える要因を抑える方法を一覧表にまとめ、それを実践し、実践したか確認する」と正しい回答をした人の割合は4割

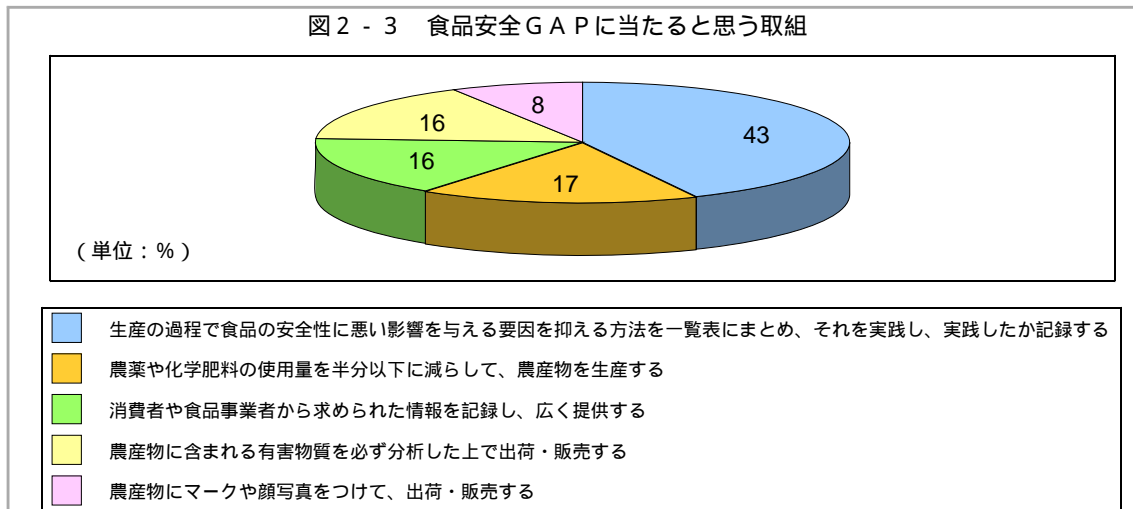
- 「農薬や化学肥料の使用量を半分以下に減らして、農産物を生産する」
- 「消費者や食品事業者から求められた情報を記録し、広く提供する」
- 「生産の過程で食品の安全性に悪い影響を与える要因を抑える方法を一覧表にまとめ、それを実践し、実践したか確認する」
- 「農産物にマークや顔写真をつけて、出荷・販売する」
- 「農産物に含まれる有害物質を必ず分析した上で出荷・販売する」

の5つの回答区分を提示し、この中のどれが食品安全GAPの取組に当たると思うか聞いたところ、 と回答した人の割合が最も高く43%であった(図2-3)。

食品安全GAPは、消費者の関心が特に高い食品の安全性の確保を目的とし、食品の安全性等に悪い影響を与える残留農薬、重金属、病原微生物、異物混入などの要因とその影響をできるだけ抑える生産手順・方法(水田周辺の状況確認、農薬の適正使用、水管理期間の延長、収穫機の清掃、生産資材の適切な管理、選果場の清掃・整頓など)をリストアップし、このリストにしたがって確実に実施、記録し、この記録を基に自らの生産の手順・方法を見直し、改善する取組である。

従って、 が正解である。

図2-3 食品安全GAPに当たると思う取組

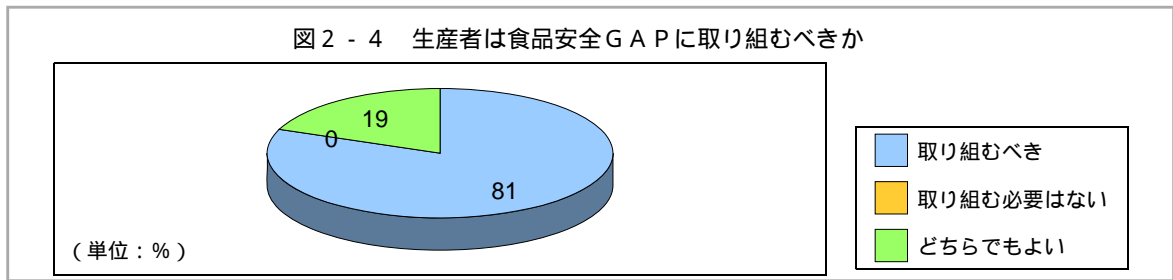


## 8. 国内の生産者は食品安全GAPに取り組むべきだと思うか

国内の生産者は、食品安全GAPに取り組むべきだと思う人が81%

国内の生産者は、食品安全GAPに取り組むべきだと思うか聞いたところ、「取り組むべき」と回答した人の割合が最も高く81%であった(図2-4)。

また、「取り組むべき」と回答した人が、「6. 食品安全GAPについて知っているか」でどのように回答したかをみると、「言葉もその内容も知っている」と回答している人は14%であった。



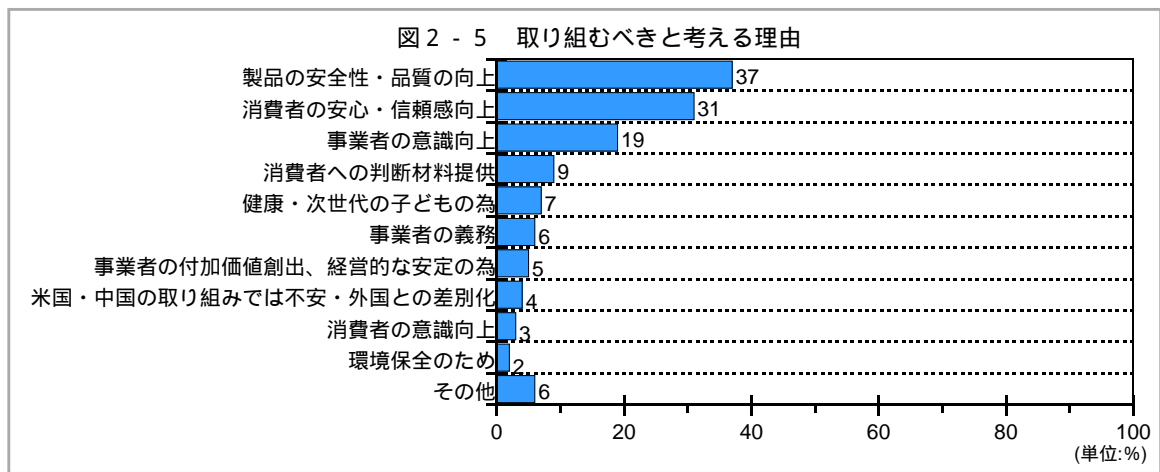
## 8 - 2 . 取り組む必要がある又はないと思う理由

国内の生産者が食品安全GAPに取り組むべきだと思うのは、「製品の安全性・品質の向上」のためであると記入した人が37%

「8 . 国内の生産者は食品安全GAPに取り組むべきだと思うか」で「取り組むべき」と回答した人(813名)に、なぜそう考えるのか聞いたところ(自由記入)、「製品の安全性・品質の向上」、「消費者の安心・信頼感向上」と回答した人の割合が高く、それぞれ37%、31%であった(図2 - 5)。

また、「取り組む必要はない」と回答した人(5名)にもなぜそう考えるのか聞いたところ、「農業者の負担が増える」、「価格にはねかえる」という回答があった。

なお、この問に対する回答は、記入のあったものを内容ごとに区分し、多かったもの10項目程度にまとめて集計した。



## 9 . 生産者に実践して欲しいと考える栽培・管理の方法

「栽培しようとする水田や畑の土壌や使用する水に含まれている可能性のある有害物質(病原微生物、残留農薬、重金属等)を把握するため分析する」と「薬や化学肥料を基準に従って使用し、その使用状況を記録する」を実践して欲しいと考えている人が多かった

以下の9つの回答区分をあげ、生産者に実践してほしいと考える栽培・管理の方法はどれか聞いたところ(複数回答、3つ以内)、であると回答した人の割合が高く、それぞれ

68%、66%であった(図2-6)。

栽培しようとする水田や畑の土壌や使用する水に含まれている可能性のある有害物質(病原微生物、残留農薬、重金属等)を把握するため分析する

完熟たい肥を散布して、土づくりをする

種を蒔いてから出荷するまでの各工程で定められた農作業を適切に管理し、その内容を記録する

農薬や化学肥料を基準に従って使用し、その使用状況を記録する

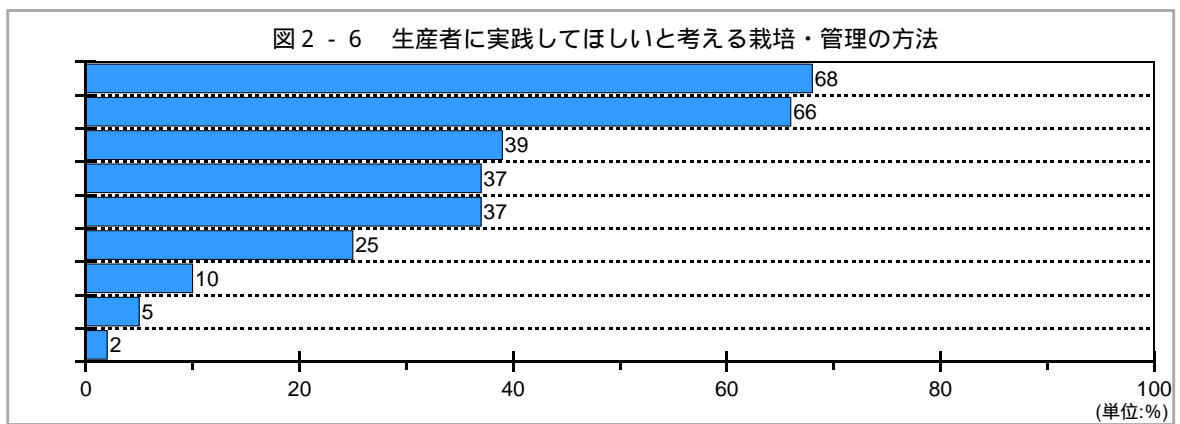
収穫機、防除機などの農業用の機械や器具をきちんと清掃する

収穫した野菜や果物を洗う場合には、飲用水を使う

収穫した農産物に含まれる可能性のある有害物質を分析する

研修会に参加し、正しい衛生管理や農薬散布を実行する

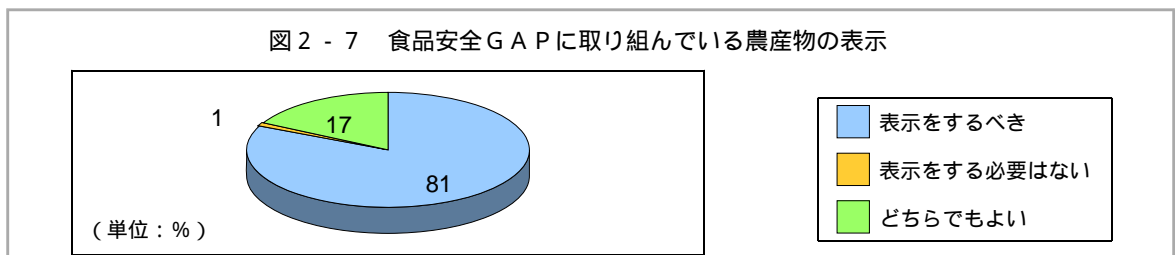
その他



#### 10. 食品安全GAPに取り組んでいる農産物にはその表示をすべきと思うか

食品安全GAPに取り組んでいる農産物にはその表示をするべきと思う人が81%

食品安全GAPに取り組んでいる農産物は、その表示をするべきだと思うか聞いたところ、「表示をするべき」と回答した人の割合が最も高く81%であった(図2-7)。



#### 10-2. 表示をするべき又は表示の必要はないと思う理由

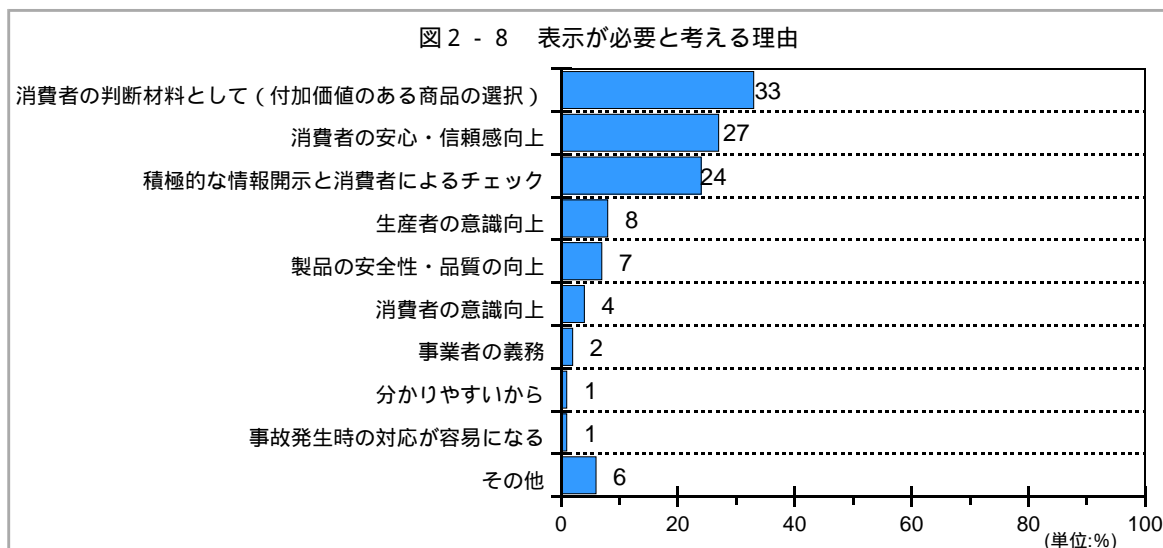
食品安全GAPに取り組んでいる農産物にはその表示をするべきと思うのは、「付加価値のある商品の選択ができる」からと考えている人が33%



「10. 食品安全GAPに取り組んでいる農産物にはその表示をすべきと思うか」で「表示をすべき」と回答した人（821名）に、なぜそう考えるのか聞いたところ（自由記入）、「付加価値のある商品の選択ができる」と考えている人の割合が33%であった（図2-8）。

また、「表示の必要はない」と回答した人（15名）にもなぜそう考えるのか聞いたところ、「消費者がGAPに対する知識がないので無意味」、「コストアップにつながる」などの回答があった。

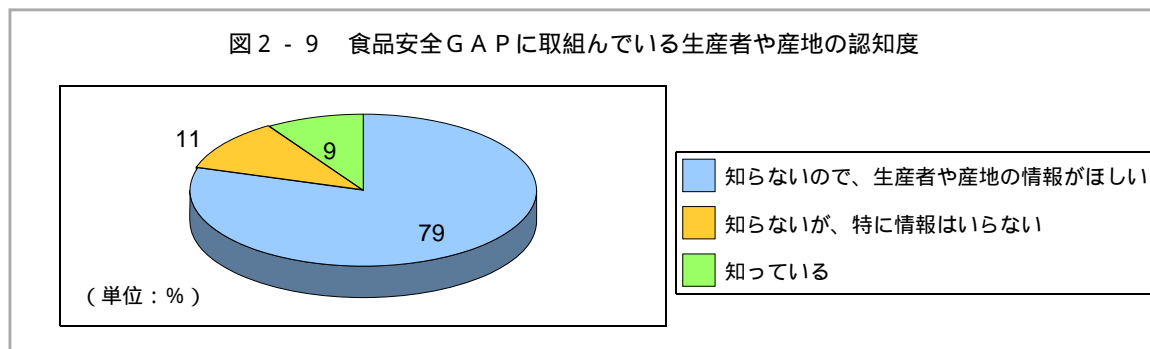
なお、この問に対する回答は、記入のあったものを内容ごとに区分し、多かったもの10項目程度にまとめて集計した。



### 11. 食品安全GAPに取り組んでいる生産者や産地を知っているか

食品安全GAPに取り組んでいる生産者や産地を知っている人は9%

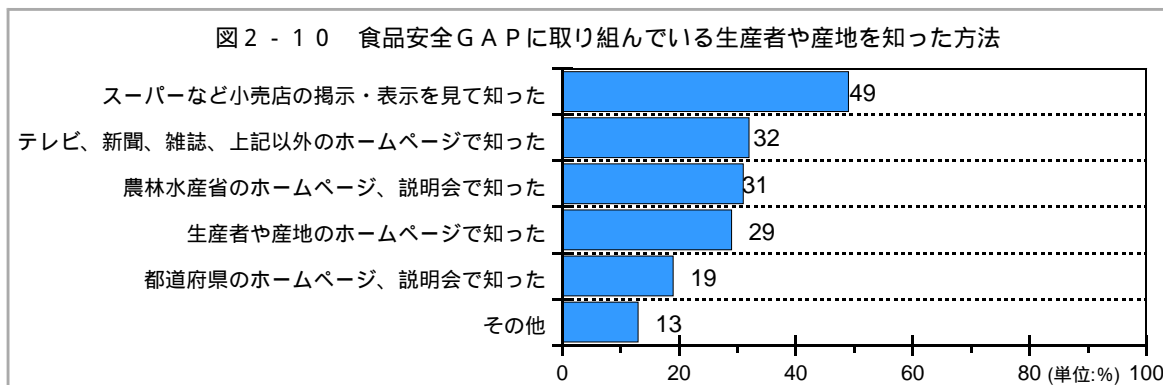
食品安全GAPに取り組んでいる生産者や産地を知っているか聞いたところ、「知っている」と回答した人の割合は9%で、「知らないなので、生産者や産地の情報がほしい」と回答した人の割合が最も高く79%であった（図2-9）。



### 11-2. 食品安全GAPに取り組んでいる生産者や産地をどのように知ったか

食品安全GAPに取り組んでいる生産者や産地を知った理由としては、「スーパーなど小売店の掲示・表示を見て知った」が多い

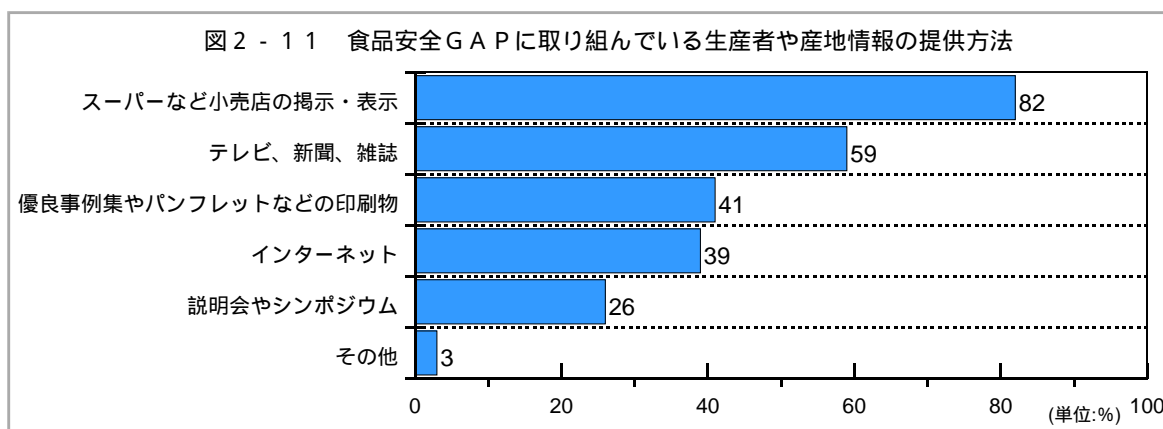
「11. 食品安全GAPに取り組んでいる生産者や産地を知っているか」で「知っている」と回答した人（95名）にどのようにして知ったか聞いたところ（複数回答、該当事項を全て選択）、「スーパーなど小売店の掲示・表示を見て知った」と回答した人の割合が高く49%であった（図2-10）。



### 11-3. 食品安全GAPに取り組んでいる生産者や産地の情報提供方法

食品安全GAPに取り組んでいる生産者や産地の情報は、「スーパーなど小売店の掲示・表示」により提供して欲しいと考えている人が82%

「11. 食品安全GAPに取り組んでいる生産者や産地を知っているか」で「知らないのので、生産者や産地の情報がほしい」と回答した人（800名）にどのような方法で提供してほしいか聞いたところ（複数回答、該当事項を全て選択）、「スーパーなど小売店の掲示・表示」と回答した人の割合が高く82%であった（図2-11）。

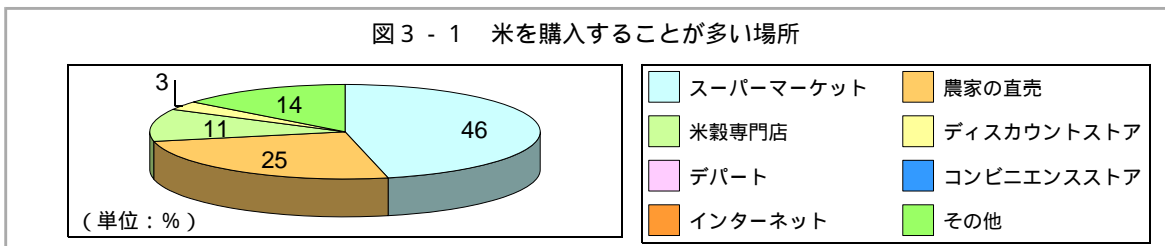


### テーマ3 . 米の表示について

#### 1 2 . 米をどこで購入するか

米を購入する場所は、「スーパーマーケット」と回答した人の割合が46%

米をどこで購入することが多いか聞いたところ、「スーパーマーケット」と回答した人の割合が高く46%、次いで「農家の直売」25%、「米穀専門店」11%であった(図3-1)。

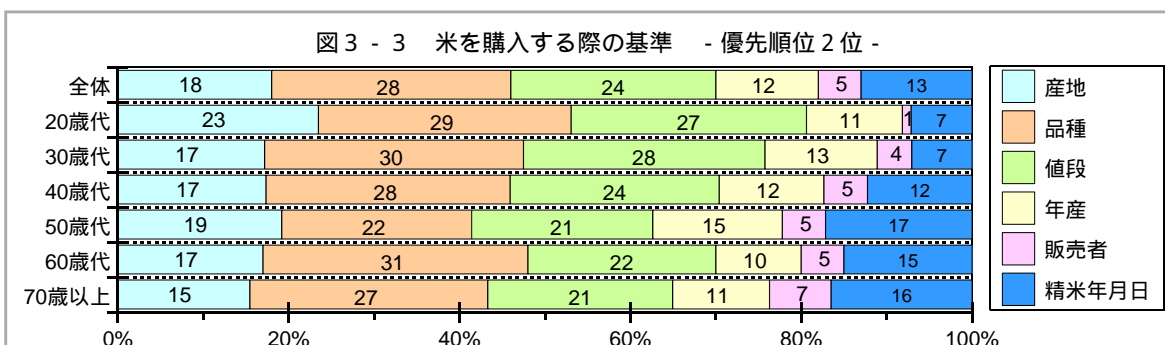
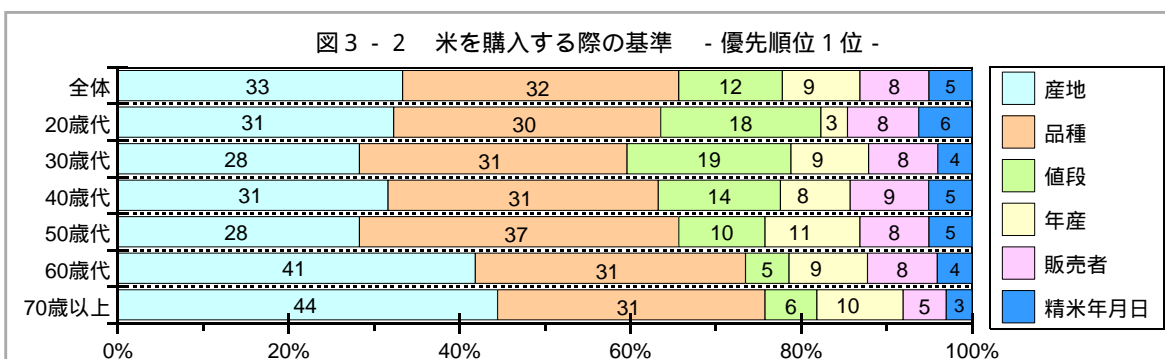


#### 1 3 . 米を購入する際の基準

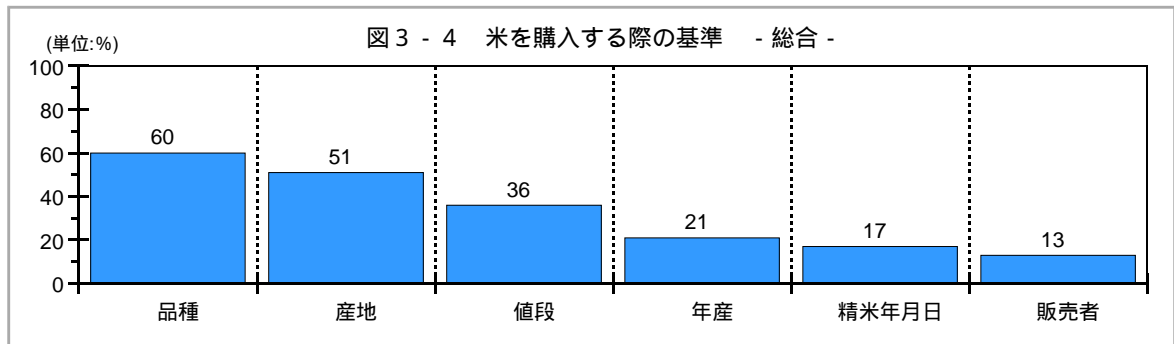
米を購入する際の基準として優先するのは、「産地」と「品種」と回答した人が多い

米を購入する際、何を基準にしているか聞いたところ(複数回答、優先順位の高い順に2つ)、優先順位の1位に、「産地」、「品種」と回答した人の割合が高く、それぞれ33%、32%であった。「産地」と回答したのは他の年代に比べ、60歳代、70歳以上が高い割合であった(図3-2)。

優先順位の2位には、「品種」、「値段」をあげる人の割合が高く、それぞれ28%、24%であった(図3-3)。



優先順位の1位と2位を併せて見てみると、「品種」60%、「産地」51%、「値段」36%となり、購入する基準としてこの3項目を重視していることがうかがえる（図3-4）。

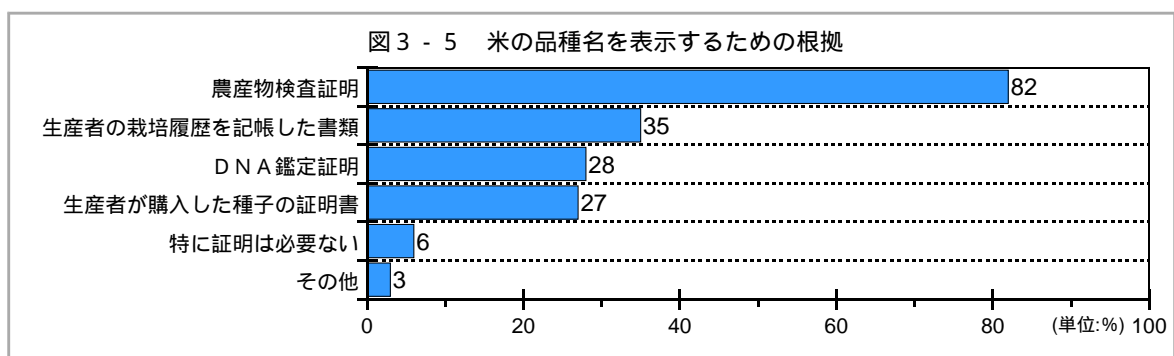


#### 14. 米の品種名を表示するための根拠としてふさわしいと考えること

米の品種名を表示するための根拠として、現行の証明である「農産物検査証明」がふさわしいと考える人が82%

現在、米の袋には、他の品目と異なり、品種名(コシヒカリ、あきたこまち等)の表示を行うこととなっており、農産物検査証明(米の等級、産地、品種、年産等を農産物検査法に基づき証明する制度)を受けたもののみが品種名を表示できることになっている。

そこで、米の品種名を表示するための根拠として何がふさわしいと考えるか聞いたところ(複数回答、該当事項を全て選択)、「農産物検査証明」と回答した人の割合が最も高く82%、次いで「生産者の栽培履歴を記帳した書類」35%、「DNA鑑定証明」29%、「生産者が購入した種子の証明書」27%であった(図3-5)。



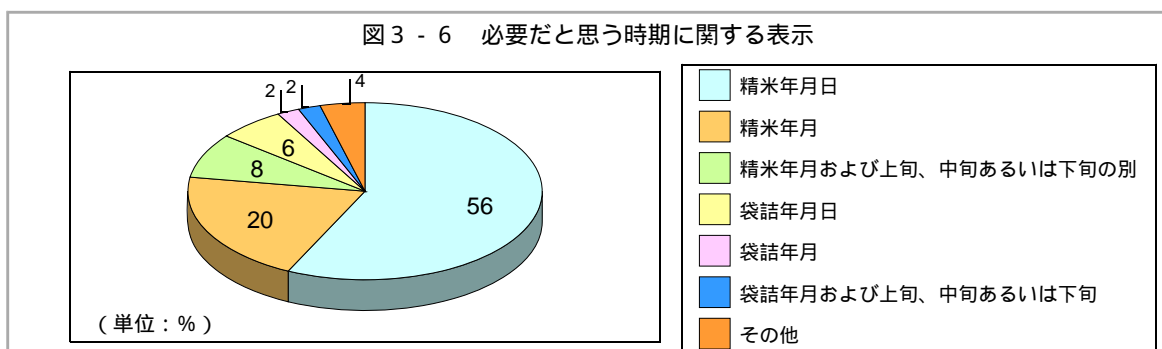
#### 15. 日付に関する表示

米の日付に関し必要と考える表示項目は、現行の表示項目である「精米年月日」と回答した人の割合が56%

現在、米の袋には、精米年月日(玄米をとう精した日付)を表示することとなっているが、米を購入する際、日付に関し、どのような表示が必要だと思うか聞いたところ、「精米年月日」と回答した人の割合が最も高く56%、次いで「精米年月」20%、「精米年月お

よび上旬、中旬あるいは下旬の別」8%であった。

これら、精米時期に関する日付の表示を望む方が84%となるのに対し、袋詰め時期に関する日付が必要と回答した人の割合は10%であり、精米時期に関する日付が必要であるという意見が多かった(図3-6)。

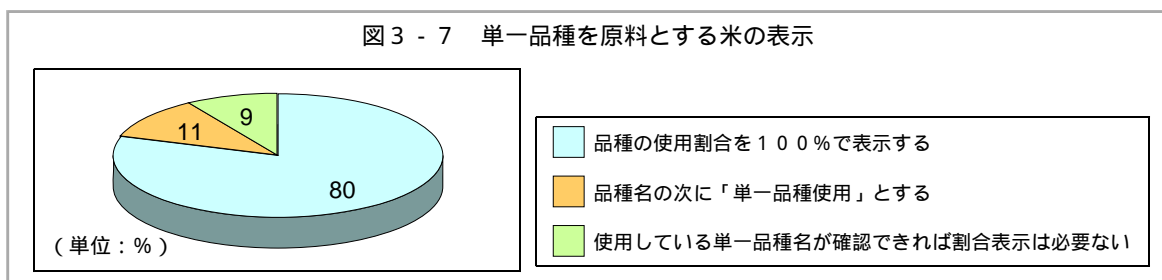


#### 16. 単一品種を原料とする米の表示としてふさわしいと考える方法

単一品種を原料とする米の品種と使用割合についての表示方法としては、現行の表示方法である「品種の使用割合を100%で表示」を80%の人が選択

米の品種の表示は、定められた様式に従い、品種名に併せて使用割合(%)を表示することが義務づけられており、単一の品種を原料とした米の場合であっても、その品種の使用割合を100%と表示することとされている。一方、米以外の品目では単一のものの場合に、100%との割合表示まで義務付けられてはいない。

そこで、単一品種を原料とする米について、どのような表示がふさわしいと考えるか聞いたところ、「品種の使用割合を100%で表示する」回答した人の割合が最も高く80%、次いで「単一品種使用表示」11%、「品種名のみ」9%であった(図3-7)。



#### 16-2. 複数の品種をブレンドした米に必要だと思う表示

複数の品種をブレンドした米の品種と使用割合についての表示方法としては、現行の表示方法である「使用した全ての品種の使用割合を%で表示」を85%の人が選択

複数の品種をブレンドした米について、その品種と使用割合に関し、どのような表示が必要だと思うか聞いたところ、「使用した品種全ての使用割合を%で表示する」と回答した人の割合が最も高く85%であった。

単一品種を原料とする米の場合と同様であり、ブレンドされている品種ごとの使用割合の表示を望むモニターが多かった（図3 - 8）。

図3 - 8 複数の品種をブレンドした米に必要なと思う表示

